

龍堂即門と面山瑞方

伊 藤 秀 真

序

福井県宝慶寺二世・永平寺五世中興の義雲（一二五三―一三三三）には、義雲の語録^①や小参等を収録した『義雲和尚語録』（以下『義雲語録』、『曹洞宗全書』へ以下『曹全』）語録一所収）がある。この語録は、延文二年（一三五七）に義雲の法嗣宝慶寺三世・永平寺六世曇希（一二八八？―一三六二？）が刊行した上巻と、宝慶寺三十世龍堂即門（*―一七二二）が上巻には収録されていない永平寺における語録等を輯めた下巻（『拾遺義雲和尚語録』）で成立している。この上下二巻のそれぞれには、正徳五年（一七一五）に序と跋が加えられている。また、巻末にはこの語録

が京都書肆柳枝軒で開版されたことが記載されている。この語録には開版時期が示されていないが、十八世紀にこの語録に対する注釈資料が成立している。依って、この語録は序や跋が記された正徳五年か、或いはそれ以降の然程離れていない時期に開版されたことになる。

さて、龍堂は『義雲語録』下巻において、「永平寺語録」を輯めただけでなく、序と「義雲和尚略伝」（以下「義雲略伝」）を撰している。この語録の序の識語を通して、^③龍堂は正徳五年に宝慶寺の住持であったことが認められる。龍堂は宝慶寺以外にも、宝慶寺末寺の阿弥陀寺三世・仏母寺四世であるが、詳しい行状は不明であり、どのような経緯で転住したのか掴めない。

ところで、面山瑞方（一六八三—一七六九）は龍堂と出会ったことにより、『義雲語録』を校訂した。面山滅後、安永二年（一七七三）から六年（一七七七）にかけて面山の法嗣諦法慧観（*—一七七五）や衡田祖量（一七〇二—一七七九）等によって『永福面山和尚広録』（以下『面山広録』、『曹全』語録三所収）が刊行される。この中には、面山が龍堂と相見したことによって著した、宝慶寺に関する詩偈や伝記等が収録されている。また、面山は龍堂からの指摘を受けて『道元禅師紀年録』（以下『紀年録』）を点検している。このようなことから、『面山広録』の宝慶寺に関する記述には、『義雲語録』と『紀年録』が用いられた部分があると考えられる。

本稿では、龍堂と面山の行状と典籍を基に、両師が如何なる関係であったのかを説明していきたい。

面山による宝慶寺拝登

面山は宝慶寺を何度か訪ねているが、初めて訪ねた時期については不明である。『面山広録』巻第二十六（一七七七年成立）には、祖量が撰した面山の「年譜」（永福開山

面山和尚年譜）が収録されている。正徳五年乙未条によると、面山は先ず、正徳五年二月に、加州（石川県）を出て永平寺を拝登したと伝えている。そして傘松峯（大仏寺跡）と血脈池を見て歩き、宝慶寺を拝登した。これが、「年譜」に記載される面山が宝慶寺に滞在した一度目のことである^⑤。この時に面山は、永平寺開山道元（一一〇〇—一二五三）の自賛画像を拝閲している。また、宝慶寺の住職である龍堂に篤く招き入れられて五日間同寺に泊まり、再訪を約束して三月には京都源光庵（鷹峯）に去ったという^⑥。そして、同年五月から六月にかけて、『義雲語録』の校訂のために宝慶寺を訪ねたと伝えている^⑦。これが、二度目の滞在である。

ところで、『面山広録』には、巻第二十六以外にも宝慶寺に関する記録がある。『面山広録』の所在と表題をまとめると、次の通りである（『曹全』語録三の頁数を併記した）。

卷第十三詩偈七言律「賀越前宝慶高峰旭公之結制演法」（慧観編、一七七三年成立。五二二b）

卷第十四詩偈七言絶「越前宝慶禅寺十六題詠並序」
(同右。五四九a—五五一a)

卷第二十四考「天童浄和尚真贊考」(祖量重編、一七七
七七年成立。七七六b—七七七a)

卷第二十五伝「宝慶寺寂円禅師伝」(同右。七九八
a—b)

卷第十三の高峰旭公とは、宝慶寺三十三世香峯全旭
(*—一七五三)のことである。この結制演法の偈は、面
山が全旭のために贈った七言律詩を掲げているので、龍堂
との関係は含まれていない。

卷第十四には、宝慶寺における十六箇所の景勝地を詠ん
だ「越前宝慶禅寺十六題詠」(以下「十六題詠」とその序
が収録されている。「十六題詠」の序には、「十六題詠」が
成立した経緯について触れている。冒頭には「余也二十年
前。偶過夏於越之薦福山宝慶古刹。」^⑧とあり、「十六題
詠」は面山が序を撰した二十年前の夏に筆録されたことに
なる。「面山広録」に収録されている「十六題詠」には識
語の記載はないが、宝慶寺に所蔵されている「十六題詠」

には「享保二十年星舎乙卯春三月吉旦」とある。序の冒頭
と宝慶寺所蔵「十六題詠」の識語をもとに「十六題詠」が
成立した時期を求めると正徳五年になり、面山が宝慶寺に
二度目の滞在をしている時期と重なる。面山が『義雲語
録』の校訂を行った時と同じ時期に、面山は宝慶寺の十六
箇所の景勝地を詠んだことになる。^⑨

卷第二十四「天童浄和尚真贊考」(以下「真贊考」)
は、宝慶寺に所蔵されている如浄(一一六三—一二二八)
の画像贊に対する、面山の考が収録されている。この「真
贊考」は、後述する合綴本の一つである。

「真贊考」には、「後寓宝慶一夏。因請出拝看。即是浄
祖真影。」^⑩という一節がある。これは、面山が出山の法嗣
隠之道頭(一六六三—一七三六?)と談じたことの後に述
べられている。「年譜」には、正徳五年までに度々、面山
と隠之の相見が認められる。^⑪面山が宝慶寺で如浄の画像を
見た時期が夏であれば、隠之との相見後にあたる『義雲語
録』を校訂した二度目の滞在時期(正徳五年五月から六
月)と同時期であるとも受けとめられるが、具体的な時期
は不明である。

卷第二十五「宝慶寺寂円禅師伝」（以下「寂円伝」）には、面山が撰した宝慶寺開山寂円（一一〇七？—一二九九？）の伝記が収録されている。「真贊考」の表題の下には「附三寂円禅師伝末」とあるので、宝慶寺には面山がこの伝記の末尾に、如浄の画像贊に対する考を筆録した合綴本があったことになる。それは、「真贊考」の「余因依龍堂力生之求。撰寂円禅師伝。乃為此考附尾。」と、龍堂の求めで面山が「寂円伝」を著して、その巻末に「真贊考」を付けて成立したという一節からも言及できることである。後年、『面山広録』において卷第二十四には考、卷第二十五には伝を収載することになり、この体裁に従って別々に収録されたのである。この合綴本に関しては、寛政元年（一七八九）に宝慶寺四十一世建徳成寅（*一八一三？）が浄書したという記録もあるが、原本と成寅の写本は散逸している。

このように、面山は正徳五年に二度、龍堂と相見した。この相見後、宝慶寺に関する記録が面山によって著されたのである。

『義雲語録』の開版事業について

二巻本『義雲語録』には、江戸時代に輯めた義雲の語録以外にも下巻成立時に加筆された部分がある。次に、この二巻本の開版に合わせて加えられた箇所とその撰者をまとめることにする（『曹全』語録一の頁数を併記した）。

上巻

序 卍山道白 一 a b

目次 二 a

義雲画像と独孤淳朋の贊 三

跋 黠外愚中 二十 b

下巻

序 龍堂即門 二十一 a

目次 二十一 b

語録（永平寺語録） 龍堂即門輯

上堂 二十二 a 一 三十二 a

小参 三十二 a 一 三十四 b

贊（雲居膺和尚贊） 三十四 b

偈（謝監寺偈）三十四 b

銘（永平禪寺鐘銘並序）三十四 b—三十五 a

正法眼藏品目頌（永平正法眼藏品目頌並序）三十五

a—四十一 a

義雲略伝 龍堂即門 四十 b—四十一 a

跋 面山瑞方 四十一 b

右に記載した中で識語が含まれているのは、上巻の独狐淳朋（一二五九—一三三六）の贊と下巻の正法眼藏品目頌、そして上下巻の序と跋である。独狐の贊に付けられた識語には「泰定改元歲在甲子春」と、正中元年（一三二四）春を示している。また、正法眼藏品目頌の序の末尾には「嘉曆四年中夏」と、嘉曆四年（一三二九）五月を示している。何れも、下巻の成立時に著された部分ではない。

一方、上下巻の序と跋は、この二巻本の成立に合わせて撰述されたものである。これらの識語の一部を挙げると、上巻の序には「正徳乙未季夏祥旦」、同跋には「正徳第五龍次乙未穰九月旦」、下巻の序には「正徳第五歲在未孟秋穀旦」、同跋には「正徳乙未菊月良辰」とある。「正徳乙

未」とは正徳五年のことで、全て同じ年に記述されている。但し、上巻の跋と下巻の序と跋が著された季節は秋であるが、上巻の序は夏である。

ところで、『義雲語録』には、龍堂と面山以外にも二師が携わっている点に気付くことができるであろう。この二師とは、上巻の序を著した卍山道白（一六三六—一七一五）、そして同跋を著した黠外愚中（一六七九—一七三七）である。龍堂とこの二師との繋がりは明らかにならないが、面山とは幾つかの記録を通して確認することができる。次に、『面山広録』を中心に、「面山とこの二師の關係について取り上げていきたい。

先ず、卍山が撰じた『義雲語録』上巻の序の末尾には、「維時正徳乙未季夏祥旦。卍山老柄欽序于洛北鷹峯之卍堂」と、正徳五年四月一日に京都の源光庵（洛北鷹峯之卍堂）でこれが著されたことが記されている。

さて、面山と卍山の初相見の時期は不明だが、「年譜」には元禄十六年（一七〇三）四月、浅草邸舎で会ったことが最初の記録である。¹⁵⁾

卍山は『義雲語録』上巻の序を著した正徳五年に八十歳

となり、是年に面山が誕生傷を贈っている。¹⁶そして同年八月、卍山は示寂した。面山は、卍山寂後に何度も卍山の回忌法要に参随していること等から、両師の親密な関係が窺える。¹⁷

面山が正徳五年、一度目に宝慶寺を訪問した後に離れた理由は、卍山に『義雲語録』上巻の序の執筆を要請したからであろう。この序は恐らく他の序や跋と同様、当初は秋に著述される予定であったと思われる。しかし、卍山の四大不調により急遽、その時期を早める必要があったのではなからうか。

次に、愚中が撰した『義雲語録』上巻の跋の末尾をみると、「正徳第五龍次乙未穰九月旦。城州窮谷小衲愚中拝撰」と、正徳五年九月一日に京都市左京区久多（窮谷は久多に同じ。自性寺）でこれが著されたことが記されている。さて、愚中は、面山と同じく損翁宗益（二六四九—一七〇五）の法嗣である。面山と愚中の初相見の時期は不明だが、「年譜」は正徳元年（二七一—）四月、愚中が空印寺十一世笑巖同眉（*一七二〇）の夏制において首座であったと伝えている。また、面山はこの夏制で副悦を勤め

ていたと記されているので、この時に面山と愚中は出会っていることになる。¹⁸

その他、『面山広録』には、面山が自性寺を訪ねていることや愚中のために傷を詠んだことが記録されている。¹⁹

このように、面山は『義雲語録』の校訂を担い、龍堂との懸け橋となつて『義雲語録』上巻に卍山の序と愚中の跋を載せることが適つたのである。面山は正徳五年秋に宝慶寺を再訪し、愚中の上巻跋と龍堂の下巻序、そして自身の下巻跋を携えて、京都の柳枝軒で開版させたのである。

『面山広録』の宝慶寺に関する記述について

『面山広録』に収録されている宝慶寺に関する記述は、面山が龍堂と相見した後、『義雲語録』が成立したとされる正徳五年かそれ以降に著されたと考えられる。面山が『義雲語録』の校訂を行ったのであれば、『面山広録』の宝慶寺に関する記述に『義雲語録』を用いることや対応する部分が含まれていることは、想像の範疇に入るのである。

ところで、『面山広録』巻第二十四「眞贊考」には、「龍堂云。之也蓋依『永平紀年録』而誤耳。余尋檢『紀年録』」と

ある。『紀年録』は、永平寺三十一世大了愚門（一六一三—一六八七）が道元の年譜をまとめ、巻末に自らの跋（二六七八年）を加えた〈乾〉と、「天童俊明極与宗可語」と「吉祥山十一境」、年譜の補注を収録した「附餘」（坤）を合わせて元禄二年（一六八九年）、京都市中京区麩屋林伝左衛門（洛陽書林）によって開版された。「真贊考」のこの一節は、龍堂が『紀年録』における如浄の画像賛と宗可の法語の末尾にある識語に問題があることを指摘した。その後、面山が『紀年録』を点検したのである。現在、宝慶寺において『紀年録』の所在を確認することはできないが、この当時は宝慶寺に『紀年録』が蔵書されていたのである。『面山広録』の中には、『紀年録』を考慮して宝慶寺に関して記された部分があると考えられることのできるであろう。

このように『面山広録』には、『義雲語録』や『紀年録』と対応する箇所が含まれている可能性がある。この節では、果たしてこの仮説通りであるのかを検討したい。

1 『義雲語録』が用いられたと考えられる『面山広録』の記述

・牛と犬の逸話

「義雲略伝」（『義雲語録』下巻所収）は、龍堂が撰した義雲の伝記である。この伝記には、「乃侍^①左右採薪汲水。苦行辛修殆乎二十年。遂証^②契堂奥之密旨^③。」と、義雲が寂円の下で二十年修行して、遂に堂奥の密旨を受けることが認められたという一節がある。

一方、『面山広録』巻第二十五「寂円伝」には「一牛一犬常時馴従。野州太守藤氏偶出獵。逐^④獸入^⑤山。忽見^⑥師之定^⑦坐石上。而生^⑧奇想。問訊恭敬。後弥帰信。受^⑨菩薩戒。取^⑩弟子礼。号^⑪真空沙弥^⑫。」（牛と犬が寂円に随従していたことと、宝慶寺の開基伊自良氏（野州太守藤氏）が獵に出かけ、^④獸を追い、山に入り石に坐っている寂円の姿をみたところ、^⑤恭しく問訊した。その後、寂円に帰信して菩薩戒を受け^⑥弟子となり、真空沙弥と称した^⑦）という部分がある。また、この伝記には、真空沙弥の子が知円沙弥であると伝えている箇所がある^⑫。

「義雲略伝」と「寂円伝」の記述を照らしてみると、義雲

が寂円の下で堂奥の密旨を受けたことと、伊自良氏の真空沙弥が寂円の下で菩薩戒を受けた様子が重なる。また、寂円の下で参学していた義雲ら門徒の姿が寂円に随従している牛と犬のようにも映る。依つて筆者は、龍堂の「義雲略伝」を以て「寂円伝」が脚色されたのではないかと推察した。それは、『面山広録』以前に成立した「寂円の伝記」に、牛と犬が登場する逸話が含まれていないことから言えることであろう。なお、この稿では言及しないが、筆者は知円沙弥と義雲を同一人物とみる近世の説と、「寂円伝」による真空沙弥と知円沙弥が父子の関係であるという見方には異論を呈する。

・寂円の示寂

『面山広録』巻第二十五「寂円伝」には、寂円の示寂について「正安元年己亥九月十有三日。」⁽²⁷⁾と記されている。『面山広録』以前に成立した「寂円の伝記」⁽²⁸⁾をみると、『日域洞上諸祖伝』には「九月十三日示寂。」と示寂月日だけがあり、『延宝伝燈録』には「住職不_レ久。遭_レ病而化」と病に因るということだけが示されている。⁽²⁹⁾つまり、『面山

広録』以前に成立した「寂円の伝記」には、寂円の具体的な示寂時期が記されていないのである。筆者は、「義雲略伝」に「正安改元己亥九月十三日円入寂。」⁽³⁰⁾とあるので、これが「寂円伝」に用いられたのではないかと考える。

ところで、龍堂は何に依つて「義雲略伝」の中で、寂円の示寂時期を正安元年（一二九九）九月十三日と定めたのであるうか。「義雲の伝記」⁽³¹⁾をみると『日域洞上諸祖伝』には「正安元年。円囑紹_二宝慶之法席_一。」、『本朝高僧伝』には「正安元年冬住_二薦福_一。」と、何れも義雲が正安元年に宝慶寺の住持であつたと伝えている。筆者は、龍堂がこの「義雲の伝記」における義雲が宝慶寺に住した正安元年を、寂円が示寂したことに置き換えたのではないかと推察した。なお、寂円の示寂年は龍堂以降に創出されたことであるから、正安元年と定めることはできない。

・坐禅石と薔薇林

『面山広録』巻第十四「十六題詠」は、宝慶寺における景勝地名とそれに対する面山が詠んだ偈頌（七言絶句）を中心に構成されている。この序には、「因依_二龍堂主人之

責。濫吟詠乎二世義雲禪師所掲之。十有六題。」とある。「義雲禪師所掲之」は面山が校訂を行った『義雲語録』のことであろう。この語録の下巻に収載されている「義雲略伝」の末尾には、宝慶寺における十六箇所の景勝地名が列記されている。「十六題詠」は「義雲略伝」の景勝地を用いて成立したことになる。

宝慶寺の景勝地は「義雲略伝」が成立する以前、福井藩が刊行した『越前地理指南』において十四箇所が選定されている⁽³⁴⁾。この十四箇所に龍堂は、安禅石と蒼葡林⁽³⁵⁾の二箇所を加えて十六箇所とした。その後、面山がこの十六箇所の景勝地を詠んだのである。但し、「義雲略伝」の銀椀峯、宝鏡池、安禅石の三箇所が、「十六題詠」では銀盃峰（第十一）、宝池（第八）、坐禅石（第十）と異なる名称が用いられている。

ここで、寂円が坐った石（安禅石・坐禅石）に着目したい。『面山広録』巻第二十五「寂円伝」の中で寂円が禅を行じた部分を挙げると、寂円が深山に入り茅を結んだ「弘長年逾二年耳順。乃入越前州大野本之深山。結茅安禅。」と、藤原氏（藤氏）が獵に出かけた時、獸を追って山に入っ

龍堂即門と面山瑞方（伊藤）

た「野州大守藤氏偶出獵。逐獸入山。忽見師之定坐石上。」を指摘することができる。この二箇所からは、寂円が坐っていた場所が「義雲略伝」の安禅石とも「十六題詠」の坐禅石であるかのように捉えることもできる。面山は「十六題詠」を一度、改詠しているので改詠前の十六題が「面山広録」に収録されている景勝地名と同じであると断定できない。それならば、「義雲略伝」に依って当初は安禅石であったが、改詠時に坐禅石に置き換えた可能性もある。

・語録の引用

『義雲語録』上巻「宝慶寺語録」上堂(39)には、寂円と師懷契（一一九八一—一二八〇）との問答「問二祖云——扠袖而嘯去⁽⁴¹⁾」が含まれている（^()内の数字は、『義雲語録』の収録順に従ってあてた列次番号である）。『義雲語録』の上堂であれば、冒頭には「上堂」の語がある。しかし、上堂(39)にはその語がない。上堂(38)の後であることと、この後にも上堂語が収録されている。二つの上堂に挟まれていることから、便宜上、上堂の列次番号をあてた。

さて、この上堂³⁹には義雲が永平寺住持中、師寂円三十三回忌のために宝慶寺へと赴き、その時に行った陸座の法語等が含まれている。寂円が示寂した時期は不詳だが、先述した「義雲略伝」による正安元年（一二九九）を示寂年とすれば、三十三回忌は元弘元年（一三三二）のことになる。

『面山広録』巻第二十五「寂円伝」には、『義雲語録』における懐奘との問答の部分が引用されている。その理由は、『面山広録』以前の「寂円の伝記」に引用されていることから、これを踏襲したのであろう。因みに「寂円伝」では、『義雲語録』の懐奘との問答を全文、そのまま用いているかのようにみえる。しかし、『義雲語録』では懐奘のことを（懐奘が道元の法嗣であるから）二祖と表し、祖と略しているが、「寂円伝」では懐奘と表し、奘と略すなど一部で差異が認められる⁴³。

2 『紀年録』が用いられたと考えられる『面山広録』の記述

・智琛と如浄の画像について

『面山広録』巻第二十四「真贗考」には「徒弟智琛乞⁴⁴語。大白老僧而有⁴⁵華押。不^レ記⁴⁶月日。乃寂円者。浄和尚之手度。初名⁴⁷智琛⁴⁸者也。」とある。この一節は、宝慶寺に所蔵されている如浄の画像贗は、如浄の徒弟智琛が如浄に頼み、如浄の華押を戴っていることと、そこに識語は記されていないが、如浄に従っていた寂円の初名が智琛であったと述べている。前述したことであるが、「真贗考」は元々、「寂円伝」（原本）の末尾に付けられたものである。この伝記で面山は、寂円が出家した時の名が智琛であったと記している⁴⁵。また、面山が延享元年（一七四四）に撰した『大宋国慶元府太白山天童景德禪寺第三十代堂頭長翁如浄祖師行録並序』では、寂円の道号が智琛であったと伝えられている⁴⁶。何れも面山は、智琛と寂円を結び付けていることが分かる。

ところで「真贗考」には、面山が叡山の法嗣隠之と宝慶寺に所蔵されている如浄の画像について談じたという記述がある⁴⁷。この時に隠之は、如浄の画像は寂円の像であり、贗は明極楚俊（一二六二—一三三六）のもの⁴⁸と指摘した。この話を面山から聞いた龍堂は、この節の冒頭で述べたよ

うに、『紀年録』（の識語）に誤りがあることを指摘した。その後、面山は『紀年録』を点検したのである。

『紀年録』坤「天童俊明極与宗可語」には、如浄の画像贊を記した後「泰定丁卯秋七月望日。太白閑房老僧楚俊書。」と、楚俊が泰定丁卯（泰定四年・一三二七）七月十五日に筆録したと伝えている。この箇所について「真贊考」では、面山が如浄の画像贊に年月日が記されていないことを挙げている。また、『紀年録』の泰定以下十七字が宗可（生卒年不詳）の法語であり、贊の末尾に誤って付けられってしまったと説いている。

このようにして、面山は龍堂による『紀年録』の指摘に依って、如浄の画像贊には如浄自身の華押が付けられていると主張し、智琛を寂円とみているのである。

・寂円が興聖寺に居たとされる記述

先述したことであるが、寂円は懷奘の法嗣である。それならば、寂円は青年期に懷奘が住している永平寺で参学していたことは推定できることである。ところで、『面山広録』巻第二十五「寂円伝」には「師与商舶来。謁祖於

龍堂即門と面山瑞方（伊藤）

深草。自後於興聖於永平。蔑須臾相離也。」とある。⁶¹この一節は、寂円が商船で渡来し、深草で道元に謁した。その後、寂円は興聖寺と永平寺で少しも道元から離れることがなく仕えていたと伝えている。

ところで、『紀年録』の寛元元年条の冒頭には、「師。四十四歳。○師。視興聖之席。自天福癸巳迄今慈之秋。前後十一年矣。出其門者」とある。⁶²これは、天福癸巳（元年・一二三三）から寛元元年（一二四三）までの十一年間、道元が興聖寺に住していた時に門徒を輩出したことを述べている。続けて門徒の名が列記されているが、この中に寂円の名が含まれている。『紀年録』には、更にこの後に、門徒の様子が記述されている。寂円のことは、「寂円衆中豪」と、中でも優れた存在であったと記されている。『面山広録』以前に成立した「寂円の伝記」⁶³では、寂円が興聖寺に居たことは触れていない。つまり、「寂円の伝記」における興聖寺の記述は、『面山広録』の「寂円伝」にはじまる。筆者はその典拠が、『紀年録』ではないかと推考した。

結

本稿では、龍堂と面山の関係について考察した。

まず、両師の初相見の時期については不明である。『面山広録』巻第二十六「年譜」には、面山が正徳五年二月に龍堂が住している宝慶寺を訪ねたことを伝える箇所があり、これが初めて両師が対面したことが分かる記述である。「年譜」では、面山が正徳五年五月から六月にかけて、宝慶寺に滞在していたことを伝えている。面山はこの時に『義雲語録』の校訂を行っていた。また、面山は是年、出山から上巻の序、愚中から上巻の跋を受け取っている。『義雲語録』は、龍堂と面山の関係者によって成立したのである。

次に、『面山広録』には、宝慶寺に関する記録がある。中でも、巻第十四「十六題詠」と巻第二十四「真贗考」、巻第二十五「寂円伝」は面山が龍堂と出会ったことにより著されたと考えられる。また、『面山広録』の中に『義雲語録』と『紀年録』が用いられていることも、両師の相見を契機としているからである。

ところで、二巻本『義雲語録』が成立した背景には、問題点がある。

先ず、この語録の下巻は、「永平寺語録」を中心に構成されている。しかし、永平寺は何度も回禄に遭っていることや、後世になってから義雲の語録が確認されたことには疑念を抱く。また、下巻「永平寺語録」の表題下には、宝慶寺の住職である龍堂がこの語録を輯めたことが示されている。龍堂が語録を輯めた経緯については、不明な点が多く疑問が残る。

「年譜」では、面山が語録の校訂を行ったと伝えていいる。しかし、本稿で展開したことを踏まえると、面山は校訂に限らず二巻本『義雲語録』を編纂した中心人物ではないかと推察される。抑も二巻本『義雲語録』は柳枝軒で開版されたこと以外、開版時の詳しい記録がない。それは、面山が中心になって語録が編纂されたために、宝慶寺と関わりがないところから開版資金が捻出されたからではなからうか。但し、本稿ではこの辺りの事情については検証していないので、あくまでも推論にとどめておくことにす

註

(1) 本稿では「宝慶寺語録」、「永平寺語録」のように略記するが、上巻「宝慶寺語録」は「義雲和尚住越州薦福山宝慶禪寺語録」、同「永平寺語録」は「吉祥山永平禪寺語録」、下巻「永平寺語録」は「拾遺義雲和尚永平禪寺語録」という表題が付けられている。

(2) たとえば、十八世紀に成立した『義雲語録』に対する注釈資料には、『義雲和尚語録事略』（面山撰・成立時期不詳）がある。

(3) 下巻序の識語には「龔題于越前州宝慶練若之含光室中。」（『曹全』語録一、二一a）とあり、龍堂がこれを著した時、宝慶寺（含光室・方丈の間）に居たことが分かる（現在の含光室は、二階の客間である）。

(4) 『鷹峯卍山和尚広録』巻第二十八記「越前州吉峯寺略記」は、「而今正徳五年乙未中春。松岡天龍寺主雄峯英公与瑞方長老。相携探吉峯。」（『曹全』語録二、五七二a）と、二月（傘松峯と血脈池を訪ねた頃と同時期）に面山と天龍寺二世雄峰智英（*1171-1176）が吉峰寺を訪ねたことを伝えられている。

(5) 正徳五年乙未 師三十三歳。二月出加州。登永平。到傘松峯。見血脈池。又登宝慶寺。（『曹全』語録三、八二五a）

龍堂即門と面山瑞方（伊藤）

(6) 拝永祖自贊画像。主人龍堂力生寵待太渥。留宿五日。約再訪。三月還鷹峯。（同右）なお、『面山広録』巻第二十五「叔円伝」には、道元の画像に対する贊が含まれている（『曹全』語録三、七九八b）。

(7) 了復到宝慶。五月六月間。考訂義雲録。（『曹全』語録三、八二五a）

(8) 同右、五四九b。

(9) 享保二十年（一七三五）の二十年前は、正徳五年である。「十六題詠」が成立した背景については、拙稿『越前宝慶寺十六題詠』の成立について（『北陸宗教文化』三一、二〇一八年）四二―四三頁を参照。

(10) 『曹全』語録三、七七六b。

(11) 「年譜」における面山と隠之の相見年次（正徳五年まで）を挙げると、宝永二年（一七〇五）、六年（一七〇九）、七年（一七一〇）、正徳二年（一七二二）、三年（一七二三）の五回である（『曹全』語録三、八二二a・八二三a・八二四a）。

(12) 『曹全』語録三、七七六b。

(13) 『曹全』語録三、七七七a。

(14) 本多喜禪『曹洞第二道場宝慶寺誌』（大野市宝慶寺誌刊行会、一九五八年）一―三頁。

(15) 『曹全』語録三、八二〇b。『面山広録』巻第十五には、卍山と梅峯竺信（一六三三―一七〇七）からの教示を感じて

龍堂即門と面山瑞方（伊藤）

詠んだ七言絶句がある（『曹全』語録三、五七八a）。また、時期は不明だが、卷第十一には「調宝林卍老人」（同上、四六四a）、卷第十三には武城に滞在した時に詠んだ「卍卍山和尚」（同上、五二五a）がある。

- (16) 『曹全』語録三、五三一a（和卍老和尚八十誕偈）。『面山広録』卷第十三には、この誕生偈以外にも卍山のため
に詠んだ「端午祝慶卍老和尚」（『曹全』語録三、五二六b）・「祝卍山和尚生日」（同上、五二七a）という祝偈が収録されている。

- (17) 『曹全』語録三、三九〇b―三九一a。『面山広録』卷第七源光開山卍山禅師忌によると、面山は卍山の回忌法要に参じていることが分かる。

- (18) 『曹全』語録三、八二三b。『面山広録』卷第十三には、面山がこの時に詠んだ「廣愚中首座賀空印安居常規韻上」（『曹全』語録三、五二八a）と「賀愚中老兄分座説法」（同上、五二八a―b）が収録されている。なお、笑巖は、卍山道白（大乘寺二十七世）―明州珠心（同二十八世、一六三六一―一七二四）―密山道顕（同二十九世、一六五二―一七三六）―笑巖同眉と卍山の法を嗣いだ人物である。また、面山は後に空印寺（十四世）に入院したことも付言しておく。
- (19) 『曹全』語録三、五二六a―b（卷第十三「到久多溪自性寺」）。但し、愚中が自性寺に住している時に詠んだ偈であるとは断定できない（愚中は自性寺三世）。

- (20) 『面山広録』卷第七には、面山が愚中のために詠んだ「景福愚中和尚十三回忌」（『曹全』語録三、三九二b）、卷第十三には、面山が愚中と松島を訪ねた時に詠んだ「和愚中禅兄遊松島詩上」（二首）（同上、五二三b）、卷第十六には「點外愚中禅師」（同上、六〇九b）が収録されている。

- (21) 『曹全』語録三、七七六b。

- (22) 『曹全』語録一、四四〇b。

- (23) 『曹全』語録三、七九八a―b。

- (24) 其子藤氏智円又施山園田。（『曹全』語録三、七九八b）

- (25) 拙稿「寂円・義雲に関する伝記史料の特徴―史料に含まれている『義雲和尚語録』を中心として」（『愛知学院大学禅研究所紀要』四四、二〇一六年）七―七二頁。ここでは、「義雲略伝」以前に成立した史料の出典を列記することに
どめる。

寂円・義雲の伝記：『日域洞上諸祖伝』卷上（一六九四年成立）、『延宝伝燈録』卷七（一七〇六年成立）。

義雲の伝記：『月坡禅師語録』卷四（一六八〇年成立）、『本朝高僧伝』卷二十五（一七〇七年成立）。

その他：『永平開山行状建撕記』（これは訂補本の内題であり、諸写本の表題・内題は異なる）。

- (26) 『大野寺社縁起』（一八三〇年成立）では「二世義雲禅師は智円沙弥也。此人性は藤原にして公家の生れにして寂円

の弟子也。」とある。これは、「義雲略伝」と「寂円伝」を拡大解釈したことによる。

(27) 『曹全』 語録三、七九八b。

(28) 註(25)を参照。

(29) 『曹全』 史伝上、四二b・『続曹洞宗全書』 史伝、六八二

a。

(30) 『曹全』 語録一、四十b。

(31) 「義雲の伝記」については、註(25)を参照。

(32) 『曹全』 史伝上、四四b・『続曹洞宗全書』 史伝、七三三

a。

(33) 『曹全』 語録三、五四九b。

(34) 杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書』上(松見文

庫、一九七一年)一〇〇b。

(35) 坐禅石(坐岩)は、宝慶寺の伽藍を北方に直線距離で凡そ

三百メートルのところにある。高さと横径が約九・七メー

ル、東西が約三・六メートルの大岩である。

蘆藪林は境内地の開山堂、或いはその周辺に植えられてい

る楠を指す。「蘆藪」とは、宝慶寺の山号「薦福」の同音異

語である。また、この二字について、石井清純・平子泰弘編

著『訓註曹洞宗禅語録全書(中世篇)』第一卷(四季社、二

〇〇五年)によると、チャンバカ、和名はキンコウボク(金

香木)のことであり、クチナシと混同して用いられているこ

とが多いと指摘している(七一頁)。

龍堂即門と面山瑞方(伊藤)

(36) 『筠州洞山悟本禅師語録』と『瑞州洞山良价禅師語録』

の冒頭には、「如是之法。仏祖密付。汝今得之。宜善保護。

銀盤盛雪。明月藏鷲。」(『大正藏』四七、五一五a・五三五

c)とある。面山が銀盤峰と称したのは、洞山良价(八〇

七―八六九)の「宝鏡三昧歌」冒頭の二節を以て置き換えた

からであろう。

(37) 宝慶寺所蔵の「十六題詠」には宝鏡池とあることから、

『面山広録』では鏡の字が脱字となっている。

(38) 『曹全』 語録三、七九八a。

(39) 同右。

(40) 享保十九年(一七三四)秋以降(翌年三月までの間)

に、改詠が行われたと考えられる。詳しくは、拙稿前掲論文

(二〇一八年)、四三―四四頁を参照。

(41) 『曹全』 語録一、九b。

(42) 註(25)を参照。

(43) 『面山広録』では、道元を祖と表しているため、『義雲語

録』のように懐契を祖と略すことができない。因みに、『面

山広録』を除く「寂円の伝記」(註(25)を参照)は、懐契の

ことを道号の孤雲と表し、雲と略している。

(44) 『曹全』 語録三、七七六b。

(45) 越前薦福山宝慶禅寺開山寂円禅師。大宋国人。依三天童

淨和尚削染。時名智琛。(『曹全』 語録三、七九八a)

(46) 智琛(号二寂円。後來于日本得法於永平二代懐契和

龍堂即門と面山瑞方（伊藤）

尚。而開_三越前大野宝慶寺。』絵_二師像_一乞_レ贊。〔中略〕《此軸現今在_二宝慶寺。字計四十。淨祖真蹟。老僧下有_二華押。》

〔曹全〕史伝下、十一 a)

(47) 語勢宛是淨和尚也。有_二他人之所_レ不_レ及。恐非_二明極_一也。〔中略〕与_レ永平総持徒_レ古所_レ秘之像。面容威儀。無_レ所_二少差。〔曹全〕語録三、七七六 b)

面山は言葉の勢いがまさしく如浄であり、他の人とは考えられないとしている。また、永平寺と総持寺に所蔵されている如浄の画像と比べても面容や威儀が少しも違わないと述べている。

(48) 〔曹全〕語録三、七七六 b。

(49) 〔曹全〕史伝下、一九三 b。

(50) 〔曹全〕語録三、七七六 b。面山は「泰定丁卯七月望日」の卯と七の間に入る「秋」を入れずに捉えている。実際は十八字である。

(51) 〔曹全〕語録三、七九八 a。

(52) 〔曹全〕史伝下、一八三 a。興聖寺で道元に参じていた門徒については「懐装僧海詮慧義介寂円義尹義演佛僧道存義準懐顯慧達等」(同上、一八三 a—b)とあり、この中に寂円の名が含まれている。

(53) 〔曹全〕史伝下、一八三 b。

(54) 註(25)を参照。

(55) 河村孝道編著『諸本対校永平開山道元禅師行状建撕記』

(大修館書店、一九七五) 一二四—一二五、一二七頁。『建撕記』の記述に限れば、暦応三年(一三四〇)や寛永十八年(一六四一、元文本のみ)に伽藍が焼失したという記述がある。